FORUM

「情念」の違和感に抗って

情念展をめぐって

藤岡 穣

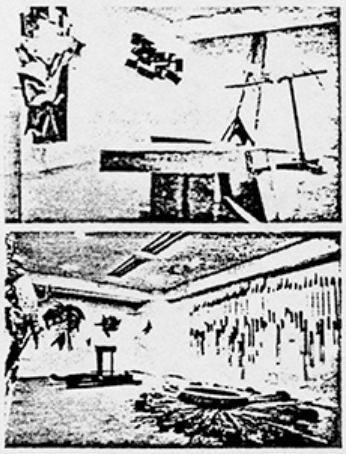
昨年12月3日から23日までの3週間、画廊パレルゴンIIでは'84年度の最後を飾る「情念展」が開催された。これは共同運営されている同画廊の責任者格である酒井信氏が企画したもので、氏は「作品を作り続けていくこと、それが情念なんだ」と各作家に声をかけた。「情念」という言葉には棘々しい印象が拭えない。参加作家の中にも抵抗を感じる者がいた。パレルゴンIIで画廊番を務める筆者も会場を訪れる幾人かに尋ねられ、その意を伝えるのにはいささか苦労したものである。酒井氏に従えば「情念とはもっとあたりまえのこと、それに違和感を覚える現在の状況の方がおかしい。情念展とは美術展ほどの意味なんだ。」どうやら「情念」とは作品の意味よりも、創作活動に深く関わっているらしい。

さて、同展には各週3人ずつの計9人の作家が参加したのであるが、筆者にはいずれも「体で感じている作家」と思われた。それだけに作品にも即物的な強さがあった。1週目の橋本夏夫氏の作品、ブリキの板から作り出されたそれは、少しずつの歪みを懐して不定形の空間さえも内包してしまう。メッキのいぶされたような材質の中に溶接剤の光沢がみごとに物の存在を告げるが、それは物の塊としてでもなく、物語的に展がる空間としてでもなく、境界された空間としてである。青野剛氏の作品では、崩れていく木箱と、それを支えているのか、解体に働いているのか繊毛を拡大したような木片とが形をとどめている。それらは木質を残しながら彩色され、有機性と無機性の隙間を漂って、自らの懸かる壁をも蠢(うごめ)かさんとする。丸亀宏也氏の作品には潜伏的な存在感があった。点滅するランプに対峙する獣、樹脂で象(かたど)られた半透明でしなやかな体内からはやはりランプが光彩を放ち、息を殺した対峙に枝先は微揺だにしない。奥壁に覆える鏡ガラスの温室は光熱を受けてジリジリと背景に眠っている。

今回の展覧会で問題として提起しておかなければならないのはグループ展のあり方である。酒井氏はともかく他の作家は多くが初対面。ミーティングに際して互いの作品記録は持ち寄ったものの、そう広くはない画廊に同時に作品を並べたときの関わり合いを予測するのは難しい。

そうした中で、2週目は3作品が期せずして画廊空間をうまく占めていたように思う。八百板力氏の泥絵具で毒々しくも鮮やかに彩色された作品、清澄さを湛えた連竹がオーロラのように垂直に走り小枝による海原は水平線までの広がりをもって果実の船を浮かべ、大小の気泡を立てる。このダイナミックな場面に、佐藤時啓氏の作品がひっそりと時を流れていく。1枚の鉄板上に繰り広げられる鉄を媒体としたエネルギー交換、水槽の蛇口からポツリ、ポツリと水が落ちる。それを振り分ける鉄、一方は炭火に灼熱した鉄炉にころがって気化し、一方は土に降って芽をいだす。飽和を越えた水と飛沫が錆を生成する。そして、一宮啓子氏の作品がこれら全き対照的な作品の周りに浮遊して見る者を無限の往復運動へと誘う。蝶、花、鳥、雲、さまざまな形が連想されては消えていく。布を三次元にコラージュして、画廊中にそれが飛び交う。ふわふわと飛び交って起結もなく、見る者の手をすり抜けていく。

3週目は酒井氏自身が出品したことにもよるのであろうか、3作品のひしめきあうさまによるのであろうか、「情念」という言葉が再び特別な意味をもって表われてきたように思われた。川越悟氏が古代器のように削られた木片、蠟を塗りこめた木片、あまたの木片を積み、置き、組む。河原の石積みを思わせる世界の構築は、生々流転や無常といった語が似合う作品であった。片居木顕氏のそれは、絡みあう垂木が手を差し延べるように八方へ拡がり、それにまといつく布が垂木の空間を覆って、その伸展に柵(しがらみ)をもたらす。筆者は拙くも松明(たいまつ)の焔のゆらめきを想い浮かべていた。木組み、網、石膏、粘土、樹脂、幾層にもなった岩塊、その表面には石跡のような穴がいくつも空いている。酒井氏の作品には、一つの塊にして歴史さえも包摂した遺物、そんな深みがあった。脇に置かれた鉢には土をこめ、その上にも粘土、樹脂を重ね、表面には小石の痕跡を残していた。



情念展第1週より(上)　情念展第2週より(下)

以上、ざっと3週間をふり返ってみたわけであるが、筆者には多少思い入れをもって見すぎたような気もする。自身としても少なからず関わりのあるパレルゴンIIで開催されたこの展覧会が成功裡に終わったことにはなむけの言葉を寄せたつもりなので、参加作家や読者の方にはご容赦願いたい。

ニューアートとデザイナー

加藤和孝の作品発表から

「ジャンル」というものの奇妙さを思ったことのある人は多いだろう。実際この「ジャンル」というやつは　現在でも奇妙なはたらきをする。

たとえば一括りに「現代美術(ニューアート)」と